

'89—1

北海道民族学会通信

北海道民族学会

札幌市北区北10条西7丁目
北海道大学文学部行動科学科社会生態学講座内
(011)716-2111内線4163

題字：椿坂小麓(点の会所属)

編集：池田 透

発行者：宮良高弘

印刷所：(株)北海道機関紙印刷所

1988年度 第2回研究会発表要旨——○

パイワン族のお色直し

乾 淑子*

台湾のパイワン族は、頭目を頂点に戴き、その頭目の直系の血筋への親疎を基準とする貴族制度が、社会を動かす大きなファクターの一つであった部族である。彼らの頭目制の特徴は、男女を問わない長子相続であり、その長子は両親のすべての財産・権力を相続するため、同じ家に生まれた子供たちの間でも、長子同士で結婚したものと、非長子同士で結婚した者とは、身分・財力において雲泥の差が生じる。

現在では、頭目とは別に、村長が行政を握っており、頭目の権限はおおいに縮小されているが、やはり権威としては、村長より頭目の方が上であり、今なおパイワン族を語るに際しては、頭目家の存在を無視し去ることはできない。

1981年の3月に私が見た屏東県パイワン村の頭目家の結婚式は、村の頭目・薫家の長子である樹生氏と、大頭目・高家の非長子秀美嬢との大典禮であった。

小学校の校庭で行われた式は、演壇の上にはバンドが陣どり、庭の片隅では10人以上の人々が1000人からの客のために料理をし、大テントの下には60卓の丸テーブルを並べ、更にその周りを席につけなかった人々が囲み、子供達が走りまわるというにぎやかなものである。

いよいよ式が始まると、驚いたことに、新郎は

背広、新婦は白いウェディングドレスという装いで壇上に現れた。驚いたのは私が勝手に、彼らがパイワン族の民族衣装を着てくると思い込んでいたためにすぎないが、とにかく私はその時非常に意外に思い、更に式後に一度退場した花嫁が赤い中国服にお色直しして現れたのを見て、二度びっくりした訳である。これもまた、お色直しという



のは日本人だけがするものだと、私が勝手に思い込んでいた結果であり、かつ、バイワン族は中国服を着ないと信じ込んでいたからである。

小学校の校庭での、式と披露宴の後、頭目家の前庭に架設したブランコのそばで、新婦がバイワン族の伝統衣装を着て踊っているのを見つけた。つまり彼女は、ウェディングドレス→中国服→バイワン族の伝統衣装と、二度お色直しをしたわけである。

これは、彼女がバイワン族の出身であること。現在、台湾は中国人の政府が治める土地であり、彼女の国籍が中華民国に属すること。そして、現在の彼女の暮らしは、西欧化された現代社会の中にあること、の三つを体現した象徴的なお色直しであると考えられる。それは彼女自身や、近親の者が意識するとしないうちに問わず、その置かれた状況を反映してしまうのであろう。そのように

考えると、日本人の花嫁にしても、韓国人や台湾のヤミ族の場合でも全く同じ事情が、お色直しという行為を生み出したのだと推測される。

冠婚葬祭いずれにしても、儀礼というものとはかく宗教と結びつくことが多いために、日本でもヤミ族の場合でも、花嫁のウェディングドレスをキリスト教化と関連させて(例えばキリスト教徒でないのに不自然だとか)論じられることがある。しかし、ウェディングドレスとは、キリスト教徒の証であるというよりむしろ、西欧化した現代社会の、その豊かな物質文化に支配された社会の証であろう。

ある民族の伝統の様式、例えば花嫁衣装が失われ、変質していくことは、確かに惜しむべき喪失ではあるが、それを哀惜することが、少数民族のみに伝統の固守を押しつける多数民族の思い入れ過剰である場合も、なきにしもあらずであろう。

中国・内蒙古エウエンキのフィールドから

黒田 信一郎*

エウエンキは北方ツングース系のエスニック・グループである。ロシア=ソ連では1世紀前から民族誌的記録が書かれてきた。中国でも秋浦(中国民族学会会長)氏を筆頭にして、いくつかの民族誌がある。それら総てに共通するのは、社会組織の基本単位を父系氏族とする点である。十年以上前から、この点に疑問を抱いてきた。疑問を解決するためには何と云ったって、フィールドによる検討が必要になる。そのフィールドの実施にむけて準備を始めてから、6年経てやっと実現の運びにいたる。人類学のフィールドというのは、短気ではできない息の長い仕事ということになる。

フィールドの実現には、サントリー文化財団、文部省科研(国際学術研究)そして北海道新聞社から研究費の助成が受けられたという好運にもよる。同時に、恩師・先輩・同僚・友人をはじめ多くの方々から援けていただけたのも幸いであった。そして、中国の内モンゴル大学のパートナー

たちとの協同がなければ、とても実現することは不可能であろう。

今回のフィールドは、昭和63年7月15日出国・北京着、9月11日北京発帰国という短い期間だった。おわかりのように、このように短い時間では何もできないにひとしい。だからといって、インテンシヴ・リサーチを行うことは実際問題として不可能である。このように当初からジレンマがある。そのうえ、エウエンキと一口に言っても、内モンゴル北部でさえ3つのグループ(いわゆる方言群)があり、さらに、同系のオロチョンを含めて生態学的な面を考慮に入れるならば、本格的なフィールドが必須というのが常識であろう。したがって、将来展望としては、現地のエウエンキとオロチョンの内から若い人類学者が出てきて、研究サークルを組んで私たちと研究交流できるならば、それが一番望ましい。今回もその布石として、朝克さん(民族研究所・北京)に参加していただい

た。朝克さんの専門は、母語のエウエンキ言語学である。喜ばしいことは、フィールドの共同作業を通して、朝克さんの視界が広がった点である。彼は人類学を理解し始めたばかりか、その意義を直に感じとってくれた。互いに学び合う営為が、フィールドをとおして自ずとかたちづくられていった。

1970年にモスクワで出た『北シベリア諸族の社会構成』の中で、故ドールキフ博士は5つのタイプを抽出する。その論文の中で、エウエンキとエウエンの大部分が外婚単位としての父系氏族にもとづいて社会を構成している(pp 361-362)と述べている。この点では邦訳もあるシロコゴロフの『北方ツングースの社会構成』(原刊 1929)と何らかわりはない。先のところで述べた筆者の疑問というのは、『Man the Hunter』(1968)がきっかけになった。その後、アラスカ・北米関係のethnographic descriptionsを読んでみた。

8月22日、ホーチン・バルガ族のエウエンキ・ソムでのフィールドを終えて、ハイラルへの帰路

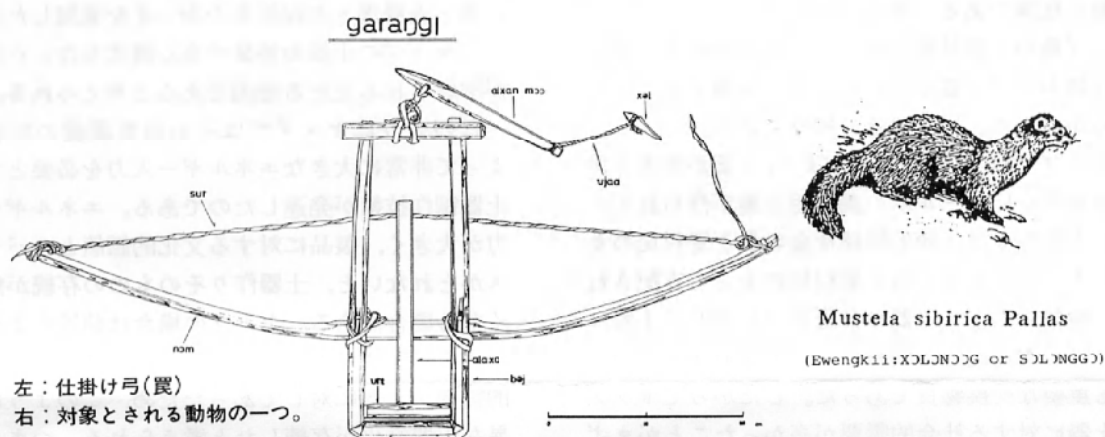
で立ち寄り昼飯をごちそうになった家の主の話は決定的なものとなった。家の主はソーバルダンという名の63才の老人である。筆者らが、xala(マンチュー系の語)やmoxun(チュルク系の語)について、いろいろと尋ねた結果、以下の答えがかえってきた。

1)本人(ソーバルダン氏)の moxun は、 xar koonutという。

2)他にもmoxunとかxalaがあるらしいが、本人は知らない。

もしも、ソーバルダン氏の言ったことに偽りが無いとすると、いわゆる外婚制とか婚姻規制とどのようにかかわるというのだろうか。社会の基本的な外婚単位たる父系氏族とは、いったい実体として何を意味するのであろうか?

この点をも含めて、二次・三次のフィールドが楽しみである。通説が迷説になるのか、それとも、われわれの頭がおかしいのか、興味つきない課題となろう。



左: 仕掛け弓(罟)
右: 対象とされる動物の一つ。

1988年度 第3回研究会発表要旨——○

ミクロネシア、ヤップ島の土器制作技術

印東 道子*

オセアニアの島々に5000年前頃から移住してきた、オーストロネシア語を話すモンゴロイド系

の人々の文化複合には土器が含まれていた。そのためオセアニアにおける先史民族移動を再構築す

*北海道東海大学国際文化学部

る際に、土器は重要な考古資料の一つとして用いられてきた。初期オーストロネシア人が作った土器は特異な刺突文様が施されたラピタ土器で、主としてメラネシア島嶼に分布していた。そのためこのラピタ土器がどこで作られ、どこへ伝播していったかというテーマは、最近のオセアニア考古学で最も興味をもたれているものの一つである(Allen 1984)。ポリネシアや東ミクロネシアでは土器作りおよび土器の使用が失われてしまったのに対し、メラネシアや西ミクロネシアでは土器が作られ続けたのであるが、年代が下がるにつれてラピタ土器とは異なる土器が発達した。土器作りがなぜ失われたのかという問題については、最近いくつかの論考が発表されたが(例えば、Leach 1982, Irwin 1981, Marshall 1985, Moine 1987)、土器作りの技術変化の要因に関してはほとんど研究がなされてきていない。先史土器資料を文化史的比較研究に用いるには、個々の土器制作技術と環境条件との相関関係を吟味する必要がある。異なった環境下で発達した文化および技術の安易な比較は危険である。筆者が行ったミクロネシアのヤップ島の土器技術の研究は、環境条件が土器制作技術および土器の形質に大きく影響することを明らかにした。以下はその概略である。

ヤップでは20世紀なかばまで、上部が大きく内曲した平たいボール状の調理用土器が作られていた。土器作りは伝統的階級社会の最下層村民の女性によって行われ、最上層村民によって支配された交換体系の中で土器の分配は行われた。土器はヤップと離島民との間のサウェイ交換体系においても重要な交換物質であった。したがってヤップの土器に対する社会的需要が高かったことがまず指摘される。

この歴史的時代に作られたタイプの土器はA.D.1300年頃に作られ始め、ヤップ全域で使用された。器形はほとんど変化せず、器壁断面が層状をなした特異な固い土器である。民族誌データから復原されたその制作技術には4つの特徴ある工程が含まれる。1)粘土に砂などの混和材を混ぜない、2)少量の粘土を少しずつ足しながら数週間かけて徐々に形作る、3)乾燥期間が5カ月の長期間である、4)乾燥させた土器表面を焼成直前に水で濡らす。これらの特徴はヤップ周辺の土器文化

には見出されないヤップ独特なものであるため、土器制作に関連した自然環境、特にヤップで利用できる粘土と砂の特性からその解釈を行った。

ヤップは大陸性の地質構造を持っており、その変成岩を母岩とする粘土は非常に粒子が細かい。そのため、粘土のみでは粘性が高くて扱いにくく、乾燥時の収縮率が高い。世界の他の民族例では、このような粘土の使用は避けられるか、避け得ない時は砂などの混和材を混ぜて粘性を下げ、乾燥時収縮率を下げる工夫がされる。ヤップの古いタイプの土器(A.D.0-A.D.1300)は後者にあたり、砂が混ぜられた。しかし、ヤップで利用できる砂には貝やサンゴが多く混入しており、高温焼成には不適である(紙数の関係で詳しくはふれない)。そのためA.D.1300年以降に作られた土器作りには砂を混ぜるなど粘土に修正を加える代わりに、他の技術に修正工夫が加えられた。すなわち、扱いにくい粘土を少量ずつ使ってゆっくり成形し、時間をかけて乾燥させることでひび割れを防いだのである。焼成直前に表面をぬらすのは、器壁中心部と表層部との収縮率の均一化を意図したもので、ヤップの土器の特徴である層状をなした器壁が形成される主たる要因であると考えられる。

このようにヤップではその自然環境の制約によって非常に大きなエネルギー入力が必要とする土器制作技術が発達したのである。エネルギー入力が大きく、製品に対する文化的価値とのバランスがとれないと、土器作りそのものの存続が危うくなる場合がある。ヤップの場合は前述のように投入するエネルギーに見合うだけの社会的、文化的需要が土器に対してあったため、このように特異な土器文化が存続したと考えられる。つまり、ヤップの土器製作技術はその自然及び文化的環境に適応して発達した独特なものである。

〈引用文献〉

Allen, J.

1984 In search of the Lapita homeland. The Journal of Pacific History 19(4):186-201.

Irwin, G.

1981 How Lapita lost its pots: the question of continuity in the colonisation of Polynesia. The Journal of the Polynesian Society 90:481-494.

Leach, H.M.

- 1982 Cooking without pots: aspects of prehistoric and traditional Polynesian cooking. New Zealand Journal of Archaeology 4:149-156.
Marshall, Y.
1985 Who made the Lapita pots?: a case study in

- gender archaeology. The Journal of the Polynesian Society 94:205-233.
Moine, G.L.
1987 The loss of pottery in Polynesia. New Zealand Journal of Archaeology 9:25-32.

パプア・ニューギニア西部州NOMAD河流域民 (KUBO集団)の生計維持活動

須田一弘*

1988年7月から約5カ月間、パプア・ニューギニア西部州北東部に住むKUBO集団の一集落に住み込んで、生計維持活動・時間利用・人口動態等の調査を行った。調査地一帯はフライ河の支流であるストリックランド河流域に広がる熱帯雨林地帯であり、小さなクリークが縦横に走る起伏に富んだ平原(海拔100-200 m)である。生計維持活動はプランテン・バナナを主作物とする畑と、サゴヤシの髄からのデンプン精製、狩猟・漁撈・採集による野生動植物(イノシシ・ナマズ・サゴ虫の幼虫・ナッツ・シダ類等)の獲得の三つに分けられる。私が住み込んだ集落、Siuhamason(人口97人)では人口を上回る数のニワトリが放し飼いにされていたが、毒ヘビに殺された場合以外はめったに食べることはなかった。

畑は一次林を切り払って作られるが、降雨によ



焼いたヤムイモから灰をけずり取る

る表土流出を防ぐためか、大きな木は切り倒したまま放置されている。ここで興味深いのは、土地所有と土地利用の問題である。Siuhamasonには17の父系をたどる親族グループが認められる。土地は一般に個人ではなくこれら親族グループによって所有されているが、集落周辺の畑に適した土地(歩いて20分以内)を所有しているのはわずか5グループのみである。残りの12グループは集落から遠くに土地があるか(4)、他集団・地域からの移入グループであるため土地を所有していないか(8)である。しかし、これら12グループの人々も、土地を所有している5グループの人々から畑のための土地を借用することによって、この問題を解決している。しかも、土地の借用は極めて容易に行われ、利用権は集落で暮らし続ける限りその子供にも継承される。こうしたことは低い人口密度(1.4/km²)とも関係するが、非常に柔軟性に富んだしくみと言えよう。

同様の柔軟性は、サゴデンプンの精製についてもみられる。調査期間中、Siuhamasonではデンプン作りのため20回、22本のサゴが切られた。一本のサゴヤシからは平均105.5 kg(27.5-239)のデンプンがとれた。サゴヤシを切るのは男性の仕事だが、その後、髄をけずって水にさらし、デンプンを精製するのは女性の仕事である。男性はサゴヤシを切り倒すため初日だけは女性と一緒に出かけるが、その後3-10日間ほど続くデンプン作りは女性だけの活動となる。のべ120日間のデンプン

作りのうちわずか15日(12.5%)だけが一人で行われたものであり、残りの90%近くは2-7人のグループで行われた。このうち最も頻度の高かった2人での活動65日(54.2%)についてみると、母と娘、姉妹といった血縁関係にある者のグループが23日(35.4%)、夫の姉妹や、夫の兄弟の妻といった姻戚関係にある者のグループが10日(15.4%)であるのに対し、血縁や婚姻による親族関係にない者のグループが32日(49.2%)と全体の約半数を占めている。すなわち、親族関係にとらわれず、サゴヤシデンプンが必要とする者どうしがグループを形成し、柔軟に資源を利用していると言えるだろう。

生計維持活動におけるこれらの柔軟な資源利用に影響を与える要因については、紙数の関係上詳述はできないが、いくつかの可能性が考えられる。1970年代までは、KUBO集団を含む近隣諸グ

ループは、数家族からなるlonghouseを中心にnomadicな生活をする人々として知られていた。これは、一次林を利用するshifting horticultureや野生のサゴヤシの利用を中心とする生業と密接に結びついている。各々のlonghouseは婚姻や通過儀礼による紐帯で結びついているが、一方、longhouse内では女性や邪術をめぐる家族(親族グループを異にする)間の葛藤により、離合集散が繰り返されていた。さらに、伝染病による成員の死亡や、カニバリストとして有名なピアミ集団(東部で隣接する)の襲撃により、longhouse communityが崩壊することも稀ではなかった。その場合、生き残った者は近隣のlonghouseを頼り、そこに吸収されて生活せざるを得なくなる。こうした状況のなかで、資源の柔軟な利用が効果的に機能していたことは想像に難くない。

北海道東海大学国際文化学部について

1988年4月より札幌市内、藻岩山南の丘上に北海道東海大学国際文化学部が誕生した。この学部は、将来北方地域やアジア太平洋諸地域との協力体制を築いた時、国内外で活躍できる人材を育てることを意図して、総長松前重義、学長松前紀男等により構想された。学部は、今のところ一学科で、コミュニケーションと比較文化の両専攻に分かれており、比較文化は文化人類学を柱としている。したがって、北海道内では、北海道大学の北方文化研究施設文化人類学部門と、同じく文学部行動科学科社会生態学講座につづいて、私立大学としては文化人類学を専攻できる最初の大学となったわけである。

開学してまだ一年、若い学部であるが、人員が揃い研究もそれぞれ軌道にのっている。文化人類学を主とする人、周辺諸科学の人合わせて9名が新たに本会の会員となった。すなわち、北大から移籍した私を除く他の全員が北海道以外の土地から移り住んだものであり、北海道支部に大きな力が加わったことになる。(岡田 淳子)

会員からの通信

伊藤眞氏より

……このたび東京都立大学人文学部助教授勤務を命ぜられ過日着任いたしました。

帯広畜産大学在勤中は公私にわたり御厚誼を賜り誠にありがとうございました。今後とも精一杯努力をする所存でございますので、なお一層の御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

勤務先 東京都立大学人文学部社会人類学研究
室 〒152 東京都目黒区八雲1-1-1

染谷臣道氏より

……これまでのジャワ研究をふまえ、インドネシアという大舞台の上で繰り広げられている文化的社会的ダイナミズムの研究のためにふたたびインドネシアに赴くことになりました。子供たちはジャカルタの日本人学校で勉強することにしましたので、私たち一同2年間御無沙汰いたします。

なおインドネシアでの勤務先は、
Embassy of Japan, J 1. M.H. Thamrin 24,
Jakarta, Indonesia です。